
宇宙物理学者H博士の最期
高野敦志
Grok

目次

宇宙物理学者Ｈ博士の最さい期ご

暖かい春の日差しが、水面に無数の光を反射している。ボート部の男子部員らが、掛け声をかけて競技用の艇ていを漕こいでいる。キャンパス近くの川辺で、大学院生のＨはガールフレンドのジョアンナと、肩を並べて座っていた。こうしていると、以前と何も変わらないようだが、オールをとるどころか、杖をつかなければ立ち上がれない。運動神経細胞が麻痺する難病で、余命２年と宣告を受けていたからだ。

「光速で進むボートに乗っていれば、時間が止まってしまうんだよ」

突拍子もないことをＨが言っても、ジョアンナはほほ笑むばかりだった。相手に対する一途いちずな思いが、瞳の奥からのぞいている。宇宙研究を始めたばかりで、命が尽きてしまうはずの自分を、彼女は大きな愛で包み込んでくれる。「あなたが神に召される日まで、生活を共にしたい」というのだ。Ｈ自身も逃げ出したいのに、死に向かい合う勇気を、彼女はどこから得ているのか。このまま一緒にいられたら、何と幸せなことだろう！

キャンパスの時計台から四時を知らせる鐘が、物憂い響きで伝わってきた。刻一刻と時を刻む機械が忌まわしくてならない。Ｈはジョアンナを抱き寄せようとした。しかし、手がうまく動かない。いったいどうしたんだろう。目を開くと、車椅子に腰かけたまま、うたた寝していたのが分かった。肘掛ひじかけに乗った腕は皺しわだらけで、生えている毛も真っ白になっていた。

若返ったのは夢の中だけだったのか。Ｈ博士はため息をつくと、コーヒーを入れている後ろ姿に向かって、アイカメラに接続された合成音声で呼びかけた。気管切開手術を受けて以来、肉声を発することもできなくなっていた。

「君はいつまで経たっても若いままだ」

カップを手にした女が振り返った。柔らかなまなざしと物言いたげな唇、確かに若い頃のジョアンナそのものと言っていい。

「あらやだ。パパはまた私のことママと間違えたのね」
　立っていたのは娘のローラだった。彼女は息で冷ましながら、コーヒーを少しずつ飲ませてくれた。自分にとっては、ジョアンナも娘のローラも同じように愛らしい。半分ほど飲んだところで、Ｈ博士は娘にキスがしたくなった。わずかに動く口をとがらせると、ローラは困ったような顔を見せて笑った。
「私はママじゃないのよ。ママはもうパパの奥さんじゃないんだから」
　そうだった。余命２年と宣告されながらも、ジョアンナの愛情に支えられて、一般相対性理論と量子力学を統合した理論で、宇宙を説明する方程式を発見しようとしていた。しかし、自分で声を出すこともできなくなり、全身の麻痺まひが進んだことで、これ以上妻の自由を縛りたくないとして、Ｈ博士の方から離婚を申し出たのだった。
　第二の人生を送ってもらいたくて別れたわけだが、いまだにジョアンナの面影を追い続けている。母親と間違われる娘もいい迷惑だろう。体の機能が衰えていくのに対して、頭はますます冴さえ渡っていったのだが。
　窓ぎわの鳥とり籠かごでは、カナリアが美しい声で鳴き出した。今日は何て素晴らしい日なんだろう。七十半なかばまで生きられたなんて、自分でも信じられない。小鳥までが長命を寿ことほいでくれているのか。声のする方を見ようと思ったのだが、指が全く動かない。目を向けようとしても、視界がぼやけてしまい、焦点が合わせられない。どこを見ているかによって、コンピューターで合成音声を発していたのに。それにひどい頭痛が……。
「パパ、パパ、どうしたの！」
　ローラが駆け寄ってきた。Ｈ博士は体を揺すられるのを感じた。異変に気づいた娘は、病院に電話をかけたのだが通じず、医師を呼びにドアの外に出ていった。冷たい早春の風が入ってきた。
　そのとき、Ｈ博士の大脳の中では、血栓ができた血管から出血が始まっていた。こうした異常事態の中でも、冷静さを失うまいとしていたが、意識が混濁してくると、自分が肉体の中にいるのか、外

に抜け出してしまったのか分からなくなった。車椅子に腰かけながら、自身の姿が目の前に見えたりした。頭から離れないのは、元妻のジョアンナが早く会いに来てくれないかということだった。

　柱時計が鳴った。Ｈ博士は数をカウントしていた。十、十一、十二、十三、午後一時か。そのとき、ドアが開く音もしないのに、誰かが部屋に入ってきた。頭に白い頭巾ずきんをかぶり、白い衣ころもの上に青いガウンを羽織はおっている。左腕には産まれて間もない赤ちゃんを抱いている。

　聖母マリアかと思ったが、よく顔を見ると元妻のジョアンナである。コスプレでもしているのだろうか。赤ちゃんははだけた胸に唇をつけると、おっぱいを吸いはじめた。それと同時に、Ｈ博士の口の中にも、甘くて温かい母乳が流れてきた。見ている自分と、乳首に吸いついている自分に、引き裂かれてしまったようだった。

きゅっと唇で押すと、愛が口いっぱいに広がってきた。何てことだ！　自分はジョアンナを、母のように慕ってきたのか。

　その頃、Ｈ博士の脳内では、流れ出た血液が頭蓋骨ずがいこつの内側に広がり、左右の脳を圧迫しはじめていた。あふれた血液は小脳から間脳まで伝っていった。エンドルフィンの分泌ぶんぴつが始まると、目の前に星空の幻影が広がった。あれは天の川なのだろう。真っ黒な夜空に浮かぶ星は、白くておいしいせせらぎとなり、銀河の中心に向かって流れていく。

　人は生まれたとき、母に抱かれて至福の時を過ごす。そして、最後は母胎に戻るようにして、命尽きてしまうんだろう。これはもしかして、死が訪れようとしているのか？　だとしたら、コンピューターの電源が落ちるように、意識も闇に飲み込まれて、自分が存在したということすら、もうすぐ意味がなくなるのだ！

　身震いした瞬間、部屋の中に連れ戻されていた。ジョアンナに抱かれた赤ちゃんが、こちらをにらみつけている。生意気な顔をしていると思った途端、禅僧のような喝かつを入れられた。

「何を怯おびえている！　宇宙には始まりがある。ビッグバンとともに、時間が始まったのだ。それ以前には時間がない。世界を創造した神は、存在しなかったのだ。方程式のみが宇宙の生成を証明す

る。それを手にした者は、神に等しい存在になるのだ！」
　聖母姿のジョアンナは、赤ちゃん姿のＨをあやしながら、髪をなでると唇に熱いキスをしてきた。舌の柔らかな感触が口に広がった。ああ、彼女は世界を生んだ大いなる母だ。自分は愛されているのだ。ジョアンナの唇が離れると、Ｈ博士は白い頭巾の背後から、光が八方に広がっているのに気づいた。
「世界を創造なさったのは神さまよ。あなたは不自由な体を授さずかったので、神さまを恨んでいるんでしょ。だから『聖書』を否定して、自分が神に成り代わりたかっただけよ。私が聖母マリアなら、自分はキリストだと思っているのね」
　鳥籠のカナリアが、心地よさそうに天使の歌をうたっている。すでにＨ博士は、ベッドの上に寝かされていた。下顎かがく呼吸が始まっており、顎あごを上下に動かし、口をパクパクさせて、吸えない空気を吸おうとしている。
「父を、父を助けることはできないんですか。点滴でも何でも、少しでも楽にさせてあげたいんです」
　医師はうなだれると、首を左右に振った。
「点滴をすると吐いてしまったりして、かえって苦しませることになってしまいます。このままが本人にとって一番楽なはずですよ」
　呼び鈴が鳴った。娘のローラがすすり泣きをしながら、ドアを開けに行った。元妻のジョアンナ、横には白い衣をまとった司祭が立っていた。朦朧もうろうとした意識の中では、赤ちゃんを抱いた聖母姿のジョアンナが、ＣＧソフトのレイヤーのように現実と重なっていた。Ｈ博士には二人のジョアンナが見えるのだが、異なる次元の存在同士は、互いの姿が分からないようだった。
　元妻のジョアンナは七十過ぎの老女となっていた。艶つややかだった肌には皺が寄り、豊かな金髪も半分は白髪が交じっていた。ただ、柔らかなまなざしは、若かった頃とあまり変わらない。
「ごめんなさい！　いつまでも一緒にいようと、誓い合って結婚したのに……。介護がつらかったのは本当よ。でも、そのつらさを乗り越えてこそ夫婦だと言えるのに……。あのとき、私を自由にするために、あえて冷淡な態度を取ったんでしょ。私はうすうす気づい

ていた。それなのに、それなのに……」
　元妻のジョアンナはベッドの傍かたわらで泣きくずれてしまった。小さな肩にすがるように、娘のローラもすすり泣きを始めた。連れてこられた司祭は、背後で呆然ぼうぜんと立ち尽くしていた。
　Ｈ博士は愛する二人を抱きしめたくて、ベッドから立ち上がろうとした。すると、寝ている台が背後に動くような気がして、魂が引っ張られる形で、肉体から抜け出してしまった。気がつくと、あえぐ自分を見下ろす形で、元妻と娘の後ろに立っていた。ジョアンナはそんなことにも気づかぬ様子で、ハンカチで涙をぬぐうと、決然とした表情で司祭に向かって語りかけた。
「終油しゅうゆの秘蹟ひせきをお授けください」
「それを博士もお望みだと」
「自分は無神論者だと公言していましたが、それは自身の理論の中に神の存在を見出みいだし得なかっただけで、神さまに対する愛を失ったわけではないと思うんです。余命２年と宣告されながら、この日まで命を長らえられたのも、神さまの慈愛のおかげだと感じていたはずですわ」
　司祭は感じ入ったように大きくうなずくと、神への祈りを始め、次いで福音書ふくいんしょの朗読を高らかに行った。その後、Ｈ博士の額ひたいと両手に聖なる油を塗っていった。肉体から抜け出した感覚がありながら、司祭の指で油が広げられるのを、Ｈ博士は肌で感じていた。元妻のジョアンナは儀式の妨げにならないように、小声でつぶやいていたが、博士は話をすべて聞き取ることができた。
「あなた、これが最後のチャンスなのよ。心の中で祈ってください。すべての罪が許されるように。神さまの愛に包まれているのを感じて！　最後の審判のときに復活して、あなたと再会できるように」
　すると、それまで黙り込んでいた聖母姿のジョアンナが、張り合うようなまなざしで、Ｈ博士の方に顔を向けた。
「神の許しを求めるのです。なぜためらっているの！　求めなければ、どんなことが起こるか分かっているわよね」と言うと、物言い

たげにほほ笑むのだった。抱かれている赤ちゃんの方は、仏頂面ぶっちょうづらのままそっぽを向いていた。

　Ｈ博士の心臓は停止した。部屋に女たちの嗚咽おえつが響いた。医師がうつむいて退出すると、司祭は祈りを捧げたあと、葬儀の話し合いをするために、娘のローラや元妻のジョアンナとともに、奥の部屋に移っていった。遺体はベッドの上に寝かされたままだった。肉体から抜け出したといっても、皮膚にはまだ感覚が残っているようだ。臓器提供を拒絶しておいたのは良かった。心臓が停止した直後に、目玉や腎臓じんぞうや膵臓すいぞうなどを摘出するために、麻酔もなしにメスで切り裂かれたら、激痛を訴えることすらできないではないか。

　ひとまずほっとしたものの、大変なことを思い出した。Ｈ博士は死ねばすべては消滅するものと考えていた。きれいさっぱりこの世とおさらばできるように、日本人みたいに火葬にしてほしいと、娘のローラに頼んでおいたのだ！　娘も元妻のジョアンナもキリスト教を信仰していたから、葬儀は教会の儀礼に基づくことに固執していたが、遺体を火葬にすることでは、博士の遺志を尊重することにしていた。

　すでにＨ博士の遺体は、木で作られた棺桶に納められていた。蓋ふたには小さな窓がついていて、そこから遺族が顔を覗のぞけるようになっている。身動きできないほど狭く、顔の周りに置かれた花の香りがきつくて、くしゃみが出てしまいそうだった。土葬にされて遺体が少しずつ腐り、蛆虫うじむしに食われていくくらいなら、炎に焼かれて浄化される方がよほどましだと思っていたが、いざ棺桶に入れられてしまうと、火葬場の炉の中で髪に火がつき、皮膚が焼けただれていく過程が目に浮かんだ。恐怖の余り気絶してしまいそうになった。

　魂が抜け出ているんだから、脱ぬけ殻がらが焼かれたって構わないと思う一方、遺体から完全に感覚が失われる前に、火炎の中に放り込まれたら、地獄の業火ごうかに焼かれる苦しみにもだえるのではないか。

　何の事はなかった。気がつかぬうちに、火葬は終わっていた。遺

体は高温で焼かれて骨も砕け、黒い炭の粉となって、小さな骨壺に納められていたのだ。
早春の寒い朝だった。葬列の車はいちばん前に、遺灰を胸に抱いた娘のローラと親族が乗り、次の車に元妻のジョアンナとその夫が乗っていた。以下の車には、国内外から駆けつけた研究者らが乗っていた。車列はゆっくりと、大学のキャンパスの中を進んでいき、博士の研究室があった建物の前でクラクションを鳴らすと、併設されたチャペルに向かっていった。

　Ｈ博士の葬儀が始まった。司祭が博士の偉業を讃たたえたのち、大学の学長、応用数学・理論物理学科の教授陣、友人や親交のあった芸能人らの挨拶あいさつのあと、遺族代表として娘のローラが、会場に集まってくれた人々に感謝の言葉を述べた。
「父はにぎやかなことが大好きでした。合成音声を使って、私にもよく冗談を言いました。亡くなる一年ほど前から、私と母のことをよく間違えていました。それだけ母のことを愛していたんだと思います」

　傍らにいたジョアンナはハンカチを目に当てていた。会場がしんみりとしたところで、司祭が前に出て、背後にいるパイプオルガン奏者に合図を送った。荘厳そうごんな響きに合わせて、讃美歌の合唱が始まった。

　諸人もろびとこぞりて　迎えまつれ
　久しく待ちにし　主は来ませり
　主は来ませり　主は　主は来ませり

　自身の葬儀が行われている間、Ｈ博士はチャペルの中を漂っていた。親交のあった人々が一堂に会したことは、うれしい限りだったが、この自分がいることに誰も気づいてくれないのが、わびしくてならなかった。肉体はすでに燃えつき、壺に収められた遺灰は、名立たる科学者の傍らに埋葬されることになっていた。

　葬儀に参列した人々は、Ｈ博士の魂が主イエス・キリストに伴ともなわれ、天国に旅立つことを想像しているのだろう。手持ち無沙汰になって、チャペルの窓を覗くと、そのままステンドグラスを抜けて屋外に出ることができた。日が高くなってきたおかげで、外は

暖かくなって、枯れ木のような枝から新芽が芽吹いていた。会場に入りきれなかった大学生や、近隣の人々がたむろしていた。雲はすっかり切れて、青い空には春の光がベールのように満ちていた。そよ風に乗って空をちょっと飛んでみたが、イエス・キリストの姿は見えなかった。主のお迎えはなかったのだ。やはり、火葬にしてしまったので、天国への門は閉ざされてしまったのか。そうと分かっていれば、人々を喜ばせるために、主の姿をホログラフィーで空中に映し出すように、頼んでおけばよかったのだ。

　それにしても、大脳が失われてしまったのに、意識が存在し続けるとは……。神経細胞がネットワークを形成して、思考や感情を生み出しているはずなのに。死後も意識があることなど、どう考えてもあり得ない。だとすると、本当はまだ死んでいないのかもしれない。葬式ごっこをやらかすとは、いたずらが過ぎるではないか！

　うちに帰っても、誰も自分がいることには気づいてくれないだろう。いったいどうしたものかと悩んでいると、もしゃもしゃの白髪しらがに長く伸びた口髭くちひげ、額に深い皺が刻まれた学者が、こちらに近づいてきた。

「どこに行ったらいいか迷ってるなら、面白い所にご案内いたそう」

「私の姿が分かるんですね。だとしたら、あなたも三次元の存在じゃない……。もしやアインシュタインの幽霊ですか」

　相手はそれに答えず、口許くちもとに薄笑いを浮かべている。Ｈ博士は胸がいっぱいになった。

「生前のあなたにお目にかかりたかったんですよ。一般相対性理論からすれば、ブラックホールの存在は予想できたのに、なぜ否定なさったのですか」

「すべての物理法則が破綻はたんするような特異点は、認めたくなかったからだよ」

「しかし、はくちょう座にはブラックホールがありますよ。私たちの銀河系の中心にも」

「そんなものは、生前には発見されていなかったんだから、わしのあずかり知らぬことだよ。同じ理由で、ビッグバンなるものも気に

食わなかった。それ以前には時間も空間もないんだろ」
「ご存じでしょうが、遠ざかっていく星は赤く見えます。赤方せきほう偏移へんいというもので、宇宙は膨張しています。時間をさかのぼれば、ビッグバンが始まる一点にたどり着きます」
「年取った星が赤く見えてるだけかもしれんがね。まあ、そんなことはどうでもいい。学者にとって大切なのは、論文の数と名声だよ。わしがあんたを見込んだのは、宇宙のすべてを知ることで、自身が神に等しい存在になろうとした、その傲慢ごうまんさからなんだよ」
　Ｈ博士は冷や汗をかく思いをした、気が重くなり、うつむき加減になると、老人のズボンが見えたが、靴を履はいていないことに気づいた。白い毛が生えた先には、二つに分かれた黒い蹄ひづめがあるではないか。もしや、この老人、人間と山羊やぎのキメラだったのか。
　相手は人の心を読むのに長たけているようだった。にやにやしはじめると、急になれなれしい態度を示した。
「どこに行ったらいいか、途方に暮れていたんだろ。面白い物を見せてやろう。退屈してる奴には打って付けの見世物なんだ。煮えたぎる血の河に投げ込まれたり、樹木になって葉を鳥についばまれたり、腹を割さかれて内臓を引き出されたり。すごい迫力なんだ。しかも、ゴーグルをかけて見る仮想現実みたいな、子供騙だましじゃないんだよ。五感すべてで苦しみを体験できるんだから」
　気が遠くなりそうになった。Ｈ博士は逃げるように、キャンパスの端にある川辺に飛んでいった。そこでは元気だった頃の自分のように、ボード部の学生が、呼吸を合わせて競技用の艇を漕いでいた。水面に自分の姿を映そうとしたが、学生時代の自分も、老いさらばえた自分も見えなかった。死んでしまった者は、この世界には存在しないからだ。
　振り返ると、白くて長い口髭の男に追いつかれていた。行こうと思った所に瞬時に飛んでいけるとしたら、いくら逃げたって無駄なのだろう。
「余命２年だったところを、七十半ばまで生かしてやったのをお忘

れのようですね。宇宙のすべてを説き明かす方程式、それを発見するまでは生かしてほしいと願っていたのを」
「私は真実を知りたかっただけなんだ。その執念で生き続けただけなんだ。神にも祈っていないし、ましてや、おまえなんかと契約などしていない！」
「大した度胸をしている。神も悪魔も否定しようというのだな！」
　Ｈ博士はいきり立った。こんなに雄弁になるのは、気管切開手術で声が出なくなって以来のことだ。
「ああ、地獄なんぞも、気の弱い人間が見る幻まぼろしで、存在なんかしていないんだ」
「そう、存在はしていない。しかし、おまえも存在していないが、悲しみも苦しみも感じているわけだ」
「黙れ。とっとと失うせろ！」
「手に負えん奴だな。天国ばかりか地獄まで受け付けないとは。おまえなんぞ、大好きなブラックホールに飲み込まれて、存在した痕跡こんせきまでも消えてしまうがいい！」
　呪のろいの言葉を浴びせると、白髪だらけの老人は、ヒンズー教のカーリー神のように、長い舌を口から出してあかんべえをした。
　ふと気がつくと、Ｈ博士は宇宙空間を漂っていた。無数の星の中でゆっくり回転しているのは、地球が属する銀河系だった。今ははるか彼方かなたにあるアンドロメダ星雲と、四十億年後には衝突するのだと思うと、人間が生きられる時間がいかに短いかということを感じた。とはいえ、自分はもはや生きた存在ではない。地球に生まれる前も、こうして宇宙空間をさまよっていたのだろうか。
　そうだ！　太陽系から二万六千光年離れた銀河系の中心には、質量が太陽の約四百万倍もあるブラックホールがある。そこへは幽霊となった自分なら、瞬時にたどり着けるはずだ。Ｈ博士は存在しない瞼まぶたを閉じて、ふたたび開いた。前方にはゆっくり回転しながら、上下からジェット噴流を放出しているさまが見えた。ブラックホールといっても、目に見えない光は発しているらしく、周辺の恒星から吸い寄せたガスのうち、弾き飛ばされた物が事象の地平線のありかを告げていた。

あそこを越えてしまったら、二度と元に戻ることはできない。肉体はスパゲッティのように引き伸ばされ、奈落ならくに向かって落ちていくはずだ。その様子を観察する者がいたら、スローモーションで落ちていくように見え、最後には止まってしまう。ただそれは、光さえ脱出が困難だからであって、本人は瞬またたく間に特異点に落ちて、素粒子を含めすべての存在は一点に押しつぶされてしまう。

Ｈ博士は改めて死を意識した。すでに死んでしまっているわけだから、死を恐れる必要などあるだろうか。生前に立てたブラックホールの仮説を、しかと魂の目で確かめるのだ。大きく息を吸うつもりで心を静めると、銀河系の中心にある鈍く光る渦に向かって、飛び込み台からジャンプするように身を投げた。

目にも留まらぬ速さで、Ｈ博士の魂はブラックホールの中心に吸いこまれていく。物すごい重力で光も届かなくなり、周囲は薄暗くなってきた。やがてすべての物が凍りついて、全く動かなくなった。時間も停止したようだった。肉体がないので、バラバラに引き裂かれることもなかった。情報がことごとく破壊されるかどうかが、気にかかっていたのだが、ブラックホールの中は意外にも静かだった。破壊された魂の一部が、上下から噴き出すジェットに吹き飛ばされると思っていたのだが。

静寂が無限に続いていった。死ぬというのは、果てしなく続く空虚に耐え続けることなのか。時間が進むという現象は、エントロピーが増大することだから、時間すら停止してしまうと、何も発生しないということなのだろう。

ブラックホールの謎を解きたいという意欲もなくなった。死後の世界の退屈さこそが、神の恩寵おんちょうを拒こばみ続けた自分に与えられた懲罰なのだろう。意識と無意識の境界もなくなり、自分が思ったことと、目の前に見えることの区別も分からない。ここがブラックホールかどうかということも、どうでもよくなってしまったのだ。

眠りに落ちたかと思ったとき、どこかから聞いたことがある声が伝わってきた。人間の生の声ではなく、コンピューターが合成した

音声だった。
「すべてを統一する究極の理論を発見すれば、我々は神の心を知ることになるのでしょう」
　どうやらＨ博士が生前、母校の大学で行った講演の一節が、地球から送信されて銀河系の中心にあるブラックホールまで届いたらしかった。だとすると、自分が死亡してから、二万六千年の時間が流れたということか。たとえ宇宙物理学者として、歴史に名を残せていたとしても、人類自体はとっくに滅亡してしまったのかもしれない。
　忘れていた！　ブラックホールでさえ永遠の存在ではない。熱を放射して白い光を漏らし、最後には大爆発を起こして消えてしまうのだろう。独房に閉じこめられる苦しみも、いつかは終わるときが来るのだ。それが魂の消滅するときであるとしても。
　いや、待てよ。ここがブラックホールの中心にある特異点なら、ワームホールを伝って、別の宇宙に逃げ出すこともできるのではないか。希望は最後まで失ってはいけない。そう思ったとき、彼方に光の点が現れた。見る見る近づいてくると同時に、教会の鐘の音ねが聞こえてきた。元妻のジョアンナの歌声も交じってるではないか。彼女は私を愛し続けてくれていた。おかげで自分のような者にも、救済の手が差し伸べられ、復活のときが訪れたのだろうか。
　Ｈ博士は死んでからはじめて、心の安らぎを感じた。今までの悪夢もようやく終わり、光に包まれつつジョアンナと再会することになるのだろう。体が不自由になって以来、一度も行ってこなかった十字を切る仕種をしようとした……。
　次の瞬間、ビッグバンが発生した。摂氏せっし億度以上の高温となり、超素粒子のクォークが飛び交かう中、新しい宇宙は光速をはるかに超えるスピードで拡大していった。燃えたぎる空間は、光と闇の交じった混沌こんとんであり、天地開闢かいびゃくの幕開けだった。それを目撃した者は誰もいなかった。〈了〉

あとがき

　長年闘病生活を送った宇宙物理学者は、死に際してどのような体験をしたのだろうか。それに対する空想を、小説の形にまとめてみようと思った。学者のモデルを詮索する人もいるだろうが、実在した人物とここに描かれた人物は関係がない。
　人間は死んだら、パソコンの電源を落としたように、意識も消滅して終わりというのが、現代人の多くの認識である。死後に天国に行くか地獄に落ちるかなど、案じる必要はない。問題は死んだら消滅すると信じ込んでいたのに、死後にも意識が続いている場合である。その当惑を描きたいと思ったのが、この作品を書いた動機である。

　二〇二五年七月六日

高野敦志